



・学長  
楠見晴重

・招徳酒造株式会社 社員  
大塚真帆

●女性社員と語る ものづくりに懸ける「覚悟」と「希望」  
**伝統の酒造りの現場でも輝く  
 理系女子の技術と感性**

創業1645年、京都・伏見の招徳酒造は、米と水のおいしさを生かした味わい深いお酒で多くのファンを持つ蔵元。大塚真帆さんはこの老舗の酒造りの現場を取り仕切る社員。伏見のお酒に欠かせない名水について地盤工学の立場から研究を深めてきた楠見晴重学長が、大学で農学を修めた理系女子(リケジョ)である大塚さんに、伝統的なものづくりの現場の今や、2児の母として働く環境、おいしいお酒の追求に挑む心境などを聞いた。

◆社員の仕事を一生懸けて極めると決めた

楠見 基本的なことですが、社員はどのような仕事をするのか教えていただけますか？

大塚 社員は簡単に言えば、酒造りのリーダーです。日本酒の世界には「酒屋萬流」という言葉があります。例えば、2つの蔵が同じ米、同じ水を使ったとしても、出来上がるお酒は違う。どういう装置で造るか、どういう造り方をするか、やり方によって味が変わるのが日本酒の特徴です。どの材料を使い、どういう味のお酒を造っていくか、その方向性を決める役回りをするのが社員です。社員がいなくてお酒の仕上がりにブレが出てしまいます。酒造りの各工程で、社員はこの方向は目指すおいしさに向かっているのか、間違っているのかを判断し、より良い方向へ導かなければいけません。科学的なデータから判断できる部分もありますが、最後は結局、五感を使って判断する官能評価になってきます。社員は正しい判断ができる感覚を常に持っていないといけません、これは簡単ではありません。

楠見 大塚さんはどうして社員を志されたのですか？

大塚 働くからには、一生を懸けて上を目指し続けたいというやり甲斐のある仕事に就きたいと思っていました。酒造りは奥が深く、簡単に技術を習得できるような世界ではないことに魅力を感じました。一蔵人として日本酒造りに携わりたいという気持ちだけでこの世界に飛び込みましたが、まさか数年で社員になるとは思ってもいませんでした。

楠見 これだけ情報が溢れているのに、今の学生はやりたいことをなかなか見つけられないようです。就職活動の時期になって慌てて調べたところで、自分のやりたい仕事や会社が見つかるものではありません。もっと積極的にいろいろなことを見て、何をやりたいのかを自分で見つけなさい、いつも言っているのですが、自分で探さず少し耳にしただけの情報に流されて、誰もが知っている会社ばかりに行きたがる学生も少なからずいるようです。大塚さんのように規模は小さくても優れた会社を見つけて飛び込む学生はなかなかいません。

大塚 私の場合は大手の酒造メーカーに行く考えは全くありませんでした。大手では、工程の一部にしかかかわれないだろうと思ったからです。本当に酒造りをしたいと思っていたので、小規模でも全部の工程にかかわれるような酒造メーカーを目指して就職活動をしました。

楠見 その選択をしたおかげで、普通はなかなかない社員にもなれたわけですね。

大塚 そうですね。本当に運良く。しかし、私は未熟なうちに社員になってしまったので、最初は失敗もありました。周りの方々が温かく見守ってくださったので、なんとか続けさせていただくことができて、今に至っています。

◆女性の覚悟を制度が支え、成果を生む

楠見 伝統的な男社会である酒造りの世界に飛び込まれて、女性としてご苦労はありませんでしたか？

大塚 肉体的なしんどさでつらいと感じたことはありませんで



した。しかし、女性だからとの配慮だったのかもしれませんが、最初は力仕事に加わらせてもらえず、分析や事務などのデスクワークもやりながら酒造りをしていたことにストレスを感じることはありました。

楠見 私が専門にしている土木工学の分野も男性中心の伝統が強く、トンネルの建設現場には女性はいれないということが最近までありました。それでも、トンネルや地下空間を建設あるいは設計したい女性もいるわけです。今は土木建設の現場で活躍する「ドボジョ」と呼ばれる女性も増えましたが、その先駆けとなった教員に話を聞くと、現場に飛び込んだときにやはり理想と現実の違いに戸惑ったと言っていました。大塚さんは、大学院では何を専攻されていたのですか？

大塚 農学研究科の作物学研究室にいました。醸造とは全く畑違いで、稲を水耕栽培して生理を調べる研究をしていました。

楠見 大塚さんはいわゆる「リケジョ」ですね。

大塚 確かに私はリケジョということになると思います。高校の時から理系に進み、女性が圧倒的に少ない環境でずっと過ごしてきました。本来、理系も文系も男女が半々というのが自然なバランスだと思うのですが。

楠見 理系の世界に男性と違った感性を持つ女性が入っていくことは、現場を良い方向に変えていくと思います。本学でも理系学部を志望する女性が増えています。就職で有利になるという期待もあるのだと思います。ただ、残念なことに彼女たちが仕事に就いたときには、仕事と結婚・出産を両立する難しさなど、まだまだ現実の厳しさを実感することになると思います。大塚さんは結婚されて、お子さんもおられますね。大変ではありませんか？

大塚 パートナーや両親、共に働く会社の人たちなど周囲の理解、協力が絶対に必要です。それがなければこなせないといひしひと感じています。

楠見 京都大学の稲葉カヨ副学長は、男女共同参画担当と女性研究者支援センター長を兼務されているのですが、「ロレアル・ユネスコ女性科学賞」を受賞された際のインタビューで、女性研究者が育つ条件として、「まず、本人の覚悟が重要で、その上で大学などの支援体制が整えばサポートが生きて活躍できる」という趣旨の発言をされていました。

大塚 私は「結婚して仕事を辞めるなんてもったいないことはするな。ずっと続けられる仕事をやりなさい」と両親からずっと言われて育ったので、私の中では一生懸けて仕事をするのは、当たり前になっていました。そういう職業観の中で「覚悟」は自然に持つことができたように思います。

今の社会の中で仕事と家庭を両立するためには定時にちゃんと仕事が終わるなど、職場の体制が整っていないと女性にとっては厳しいと思います。私が入社した時はまだ昔ながらの勤務体制で、冬だけ会社に泊まり込んで酒造りをする蔵人さんと一緒に仕





仕込みに使う発酵タンクがずらりと並び、冬には蔵中に新酒の香りが立ち込める



理系の世界に男性と違った感性を持つ女性が入っていくことは、現場を良い方向に変えていくと思います。本学でも理系学部を志望する女性が増えています。

事をしていました。蔵人さんのやり方は、社員が出社するずっと前の朝5時とか、早い時には3時半ぐらいから仕事を始めていました。その方々が高齢で引退し、完全に社員だけで酒造りをするようになってからは、仕事の段取りを大幅に変えました。今は冬の仕込みの時期でも朝7時半から準備を始め、夕方5時に終わるようになり、男性も夜は家族との時間を過ごして、再び朝に出勤してくるという働き方をしています。昔の酒造りのやり方からすれば、本当に想像できないような変わり方だと思います。

**楠見** 昔ながらの伝統産業でも、今の時代に合わせた男女共同参画、ワークライフバランスを考えた勤務体制が取り入れられてきているということですね。本学でも男女共同参画を推進する委員会を設けて取り組みを始めました。女性教員も増やしたいと考えています。女性教員比率は、まだそれほど高くないのですが、最近5年間の増加率は私立大学ではトップクラスです。しかし、例えば機械、物理、電気などの女性研究者が少ない理系分野ではなかなか増やすのが難しいです。これからそのような学科に女子学生が増えるように工夫をしようと考えています。女性の活用は日本全体の課題でもあるだけに、本学においてもしっかり取り組まなければいけないと思っています。

## ◆最新の知見と技術が、酒造りの現場を変える

**楠見** 私は地下水の調査で伏見酒造組合のお手伝いをさせていただいており、伏見の地下水は鉄とマンガンがほとんど含まれない中硬水であることが分かりました。伏見よりもう少し南に行きますと、鉄とマンガンがよく出ます。理由は分かりませんが、この辺りだけ含まれていないのです。素人考えですが、酒造りには鉄とマンガンが大敵ではないでしょうか。伏見では室町時代からお酒を造っています。この地を酒造りの場所に決められた昔の人は本当にすごいと思います。

**大塚** 当社では敷地内の井戸から地下水を汲み上げて仕込水に使っています。その井戸水は確かに柔らかくまろやかで、出来上がるお酒も優しい味に仕上がります。それは、本当に水の力だと思います。昔から“伏見の女酒”といわれる通りに、『はんなり』という京言葉がびったりのお酒に自然に仕上がります。

**楠見** 酒造りは経験がものをいう伝統的な職人の世界というイメージがありますが、最新の科学的な知見や技術を取り入れる動きは活発なのですか？

**大塚** 最近は素晴らしい醸造機械や技術がどんどん出て来ていて、そのような情報にアンテナを張っておかないと乗り遅れてしまいます。大学の先生方との連携も業界として盛んに取り組んでいます。また、近頃は杜氏・蔵人や社員が集まる勉強会がよくあるので、皆でいろいろな蔵の情報を収集して、当社で取り入れられるかを検討しています。

酒造りの業界では昔から兵庫の但馬杜氏、福井の糠杜氏などの杜氏集団が全国にいくつもあって、それぞれの杜氏集団の中で独自のノウハウが伝承されてきました。そのノウハウは他の杜氏集団に明かされることはなく、杜氏集団間での情報のやり取りはほとんどなかったのではないかと思います。しかし、昨

▼仕込水に使われているのは蔵の敷地内にある井戸から汲み上げた伏見の名水



今では酒造りの担い手が昔ながらの杜氏集団・蔵人から社員へと、どんどん代わってきている過渡期です。また、どの酒蔵も今は日本酒離れに対する強い危機感を持っています。そのような状況の中、ノウハウを秘密にするよりも積極的に他社とも共有し、業界全体で技術を底上げしていかなければならないという考えが酒造りの若い担い手の間にはあるのだと思います。

## ◆世界にSAKEの魅力を伝えたい

**楠見** 欧米で日本酒の消費が拡大しているそうです。さらに近年では東南アジアでも日本酒が飲まれるようになってきたと聞きます。日本酒メーカーも世界戦略を積極的に進めてはどうかと私は思うのですが、日本酒の国際化をどうお考えですか？

**大塚** 幅広い方々に日本酒に親しんでいただけることはすごくうれしいです。酒造りは日本が世界に誇れる素晴らしい技術です。和食とお酒の組み合わせも世界の方に楽しんでほしいですね。

**楠見** 熱燗は外国人の方にはなじみが無いようですね。

**大塚** 確かに燗は日本酒独特の飲み方です。

**楠見** 招徳酒造のお酒は冷酒向き、それとも燗酒向きですか？

**大塚** 当社のモットーは「燗でよし、冷やでよし」です。どちらでもおいしく飲めるお酒が目指すところです。近年、吟醸や大吟醸など香りの華やかなお酒が人気なのですが、そのようなお酒は燗よりも冷やがおすすです。燗にすると香りがきつすぎるからです。燗でも冷やでもおいしいのは、昔から使われている酵母を使ってオーソドックスに造るお酒です。香りの華やかなお酒に比べると目立ちませんが、いわゆる「味の調和した」燗でも冷やでもおいしく飲めるお酒の魅力を消費者に伝えていきたいと思っています。

## ◆日本酒本来のおいしさを追求し続ける

**楠見** 酒造りのどこに楽しさややりがいを感じますか？

**大塚** 酒造りはとても時間のかかる作業です。夏から「今年はどういうチャレンジをしよう」とか、「より良くするためにどうしたらいいか」を皆で考え準備を始めます。また、私の場合はラベルのデザインを夏にしています。そういった準備をしておいて、酒造りが本格的に始まる冬を迎えると、計画していたことを実践し、春になると新酒が次々と出来上がってきます。お酒の味が完成するのは、熟成を経て、最後に商品になった時点



純米酒にこだわり続ける招徳酒造のお酒。「四季の純米吟醸ボトルシリーズ」(写真左)をはじめ、ボトルやラベルのデザインは大塚さん自らが手がける▶

なので、冬にトライしたことが実際に形になって現れるのは、1年後になることもあります。そのような長いサイクルの最後に、目指していた味ができたか、昨年よりおいしいお酒ができたかなど、出来栄を確かめる時がこの仕事のやりがいを一番実感する瞬間です。

**楠見** これからどのようなお酒を造りたいですか？

**大塚** 伏見にはおいしい水がありますし、当社が契約している農家は良いお米を作ってくれています。この素晴らしい素材を生かしたお酒にすることが、杜氏として私の務めだと思っています。一口にお酒のおいしさといってもいろいろあると思いますが、お米から生まれる豊かなうまみや酸味といった日本酒本

働くからには、一生を懸けて上を目指し続けていけるようなやり甲斐のある仕事に就きたいと思っています。酒造りは奥が深く、簡単に技術を習得できるような世界ではないことに魅力を感じました。



来のおいしさに惹かれてこの世界に入ったので、当社がこだわってきた純米酒というカテゴリーの中で、これからもそのおいしさを追求していきたいと思っています。

切実な抱負を申し上げれば、10年、20年後も生き残っていたい。生き残るためには、造るお酒の質をもっと上げていかなければいけません。お客様に喜んでもらえるような時代に合ったお酒を提供していくことが大事だと思います。そのために何ができるかを常に考えて精進していきます。

**大塚 真帆** (おおつか まほ)  
1975年神奈川県生まれ。2000年京都大学大学院農学研究科修了。同年、1645年創業の老舗蔵元である招徳酒造株式会社入社。05年より杜氏を務める。「純米酒 嵯峨紅梅」が「ワイングラスでおいしい日本酒アワード2012」金賞、「招徳 純米原酒生もと」が「インターナショナル・サケ・チャレンジ2009」生もと・山鹿部門トロフィー（最高賞）受賞。デザインも手がけた「四季の純米吟醸ボトルシリーズ 夏の戯れ」は「ガラスびんデザインアワード2007クロワッサン賞」を受賞した。

**楠見 晴重** (くすみ はるしげ)  
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に就任。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」[アジア古都物語 京都一千年の水脈―]など。